

Special

スペシャル

王妃と自動手記人形 期間限定公開

前へ 2 / 2

それからわたくし達は互いに会っていない間のことを話した。

わたくしはダミアン様と結婚してから互いにちゃんと恋に落ちることが出来たこと。

ヴァイオレットは、紆余曲折を経て探していた最愛の主人を見つけたこと。

それがギルベルト氏であること。これからの人生で、時間をかけてでも二人でヴァイオレットが自動手記人形として訪れた美しい国々を彼にも共有したいと願っていること。

そういうことを静かに、淡々と語ってくれた。

わたくしは彼女とこんな話が出来ていることが嬉しくて仕方がない。

「そういえば、シャルロッテ様は孤児院を支援されているそうですね」

「……偽善者だと思う？」

「いいえ。実は、そちらに御恩がある少女がうちで将来働くことになっていまして」

「え、そうなの？ わたくし……お前に影響されてあの院を建てたのよ」

お互いの報告に目を見張ったり、ときめいたり、くすくすと笑ったり。

嗚呼、こんなにも警戒心なく誰かと過ごせたのはいつ以来かしら。

本当に楽しい。

あと何回こうして会える？

「そういえば公開恋文でダミアン様のもとに居た自動手記人形はどうしているの？」

まだお喋りは始まったばかりなのに、ふとそう思ってしまう。

わたくしの悪い癖。すぐに終わりを想像してしまうの。

「元気にやっております。恋人とは……いつも喧嘩しているようですが……」

人生は短いわ。あっという間に、色んなことが過ぎ去っていく。

「大丈夫なのそれ」

会えない間の期間を埋めるように過ごしても。

「大丈夫です。弊社はいつもと変わりがなく。みんな元気です」

それでもずっと一緒に居られない。

今日と明日を共に過ごして、そして別れたらもう二度と会えないかもしれない可能性だってある。

だってわたくしは王妃で、ヴァイオレットは自動手記人形。

どこにも行けない女と、どこにでも行ける女。やはり身分が違うのよ。

——嗚呼、シャルロッテ、考えるのをやめなさい。

わたくしは自分にそう叱咤する。

この時間が楽しくて仕方がないのに、終わりを意識して何だか胸がぎゅっと締め付けられる。

ヴァイオレットと二人、赤薔薇が咲くこの頃。

庭園で話した時間はわたくしにとってかけがえのない時間になるだろう。

何度も思い返すかもしれない。

——ヴァイオレットはそうじゃないかもしれないけれど。

友情にも片思いがある。

だからこそ、今のこの時間があまりにも幸せで切ない。

「シャルロッテ様」

名前を呼ばれて、わたくしはいつの間にか下がってしまっていた口角を慌てて上げた。

王妃たるものいつも優雅に、民に不安を与えず、微笑んでいなければ。

「な、なあに？」

作り笑顔は得意なはずなのに、どうしてだか今はうまく出来なかった。

「どうかされましたか」

わたくしは目の前の彼女に、ついありのままの不安げなわたくしを見せてしまう。

「ううん、胸がいっぱいだけ」

会話の最中で突然、かけがえのない『現在』に感極まって、そして寂しくなってしまったなんて、意味がわからないし、相手にとって迷惑でしかない。

「ただ……わたくし、本当に寂しかったんだわと思っただけよ」

ヴァイオレット。わたくしはお前の人生の中で、たった一頁にも満たない登場人物かもしれない。

「本当に会いたかったの」

でもわたくしの人生では大いなる役割を果たし、いつまでも心の中に居る。

「……お前が言ってくれた言葉を、つらい時によく思い出していたから」

悲しい時や、涙があふれそうな時に、お前はふとわたくしの心から顔を出して声をかけるの。

「おかしいわよね。よくよく考えたらわたくし達、そんなに親しくはないのよ。お前にとっては所詮ただの依頼人。大勢の中の一人でしかない。けれど……」

けれど、お前がしてくれたことをわたくしはずっと忘れていない。

「けれどね……」

恋を応援してくれた。

わがママを許してくれた。

泣き虫だと私に言った。

ありのままで、接してくれた年の近い女の子は、お前くらいなものだった。

「けれど……」

お前はわたくしにとって、少女時代そのもの。

あのドロッセルで過ごした、恋をしていた、ただのシャルロッテであった時間の象徴。

まるで子どもの頃の自分を抱きしめているかのようなのよ。

わかるかしら。

すごく、胸が苦しくなるの。嫌だわ。大人になるって、どうしてこんなに。

「わたくし、お前のことが好きなのよ」

こんなに、弱くなる瞬間をだめだと思ってしまうのだろう。

「……シャルロッテ様……」

その時、ヴァイオレットがわたくしに口づけするかと思うほど近づいて手を伸ばした。

「『貴方の涙を止めて差し上げたい』」

そうして、あふれそうになっていた一滴の涙を指先ですくった。

「確か、そう言ったことがありました。シャルロッテ様」

「……」

わたくしは少し呆ける。覚えていてくれたとは思わなかった。

「まだ、泣き虫ですか……？」

優しく問いかけられて、もう一滴こぼれそうになる。慌てて目をおさえた。

「……そんなわけないでしょう。わたくしはもう王妃なんだから」

「はい」

「ダミアン様だっているのよ。わたくし、あの方の妻なの」

「はい」

「わたくし、強くなったのよ。でも……いま少しだけ弱くなったの、一時的なものよ」

「はい、承知しております」

嗚呼、お前って。ヴァイオレット。

「シャルロッテ様、もしよろしければ」

時々とても無神経で。

「ライデンシャフトリヒに外遊で来られることがあれば」

残酷で。

「ぜひ、お呼びください。馳せ参じます」

でも、泣けてしまうくらい優しい。

「あの街をいつか貴方にお見せしたい……」

わたくしがお前の何気ない一言で救われていることを、お前は知らない。

ヴァイオレットがいつの間にか手巾を差し出している。それを受け取り、わたくしは泣き顔を隠しながら、でも威勢だけはよくして言った。

「行くわ、いつか絶対に行く。そうしたらお前、案内しなさいよ！」

ヴァイオレットが、恐らくは笑っているであろう声音で『はい』と返す。

「……絶対よ」

わたくしはきっと、いつかまたヴァイオレットと会えたとしても同じことになるだろう。

会えないからこそ、会えた時に嬉しくて切なくなる。

「勿論です。何でもしたら誓約書をしたためます。……あ、シャルロッテ様。少佐が戻って来られました」

た

わたくし達が話す内容は以前とは変わった。もう片思いの恋文の話はしていないし。わたくしは彼女の前でふてくされて寝台でうずくまったりはしない。

「嫌だわ、こんな顔見せられない」

けれど、たとえどれほど月日が流れようと。

「お綺麗です」

思い出が消えたわけではない。

今日、こうして会えた。明日別れても、お前はきっと世界のどこかで旅をしている。

「目、赤くない？」

「はい、シャルロッテ様」

そう思うと楽しみなってきた。土産話がたまった頃に、会いたいと手紙を書いてみようかしら。

「王妃陛下、私もヴァイオレットとご一緒しても？」

「もちろんよ、さあ座って」

書き出しはもう決まっている。

「少佐、素敵なお話を聞きました。お話ししても良いでしょうか」

「ああ、聞かせてくれヴァイオレット」

「シャルロッテ様が作られた孤児院が……」

拜啓、ヴァイオレット・エヴァーガーデン様。お元気でしょうか。

わたくしは、お前に会いたいです。

前へ 2 / 2